ピース・ウイング長崎 会報

へいわ

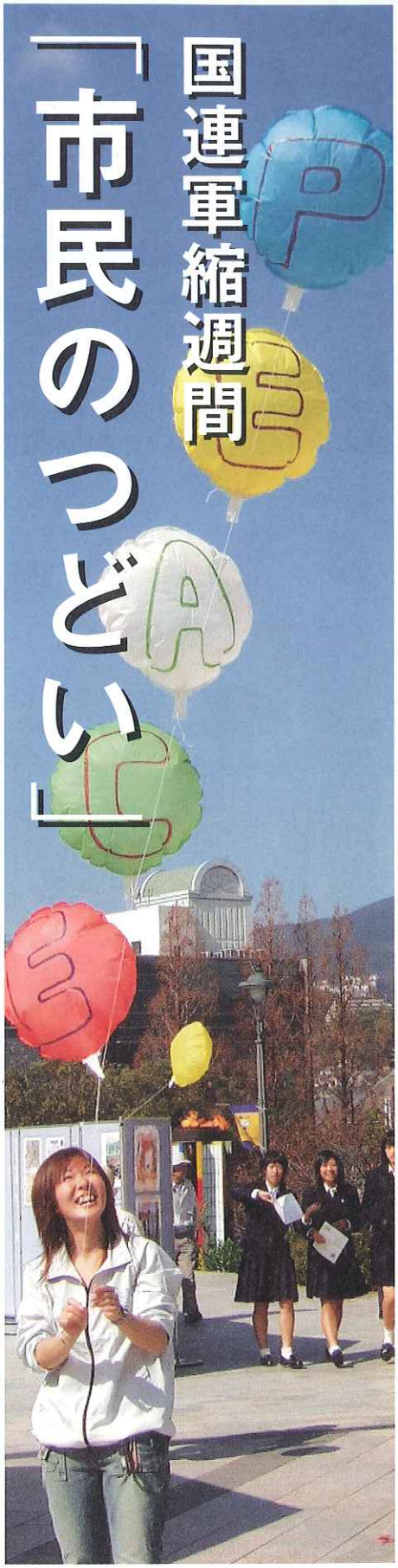
112号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町7番8号 ■電話（095）844-9922　FAX（095）814-0056
http://www.peace-wing-n.or.jp

■市民のつどい
■第3回「核兵器廃絶ー地球市民集会ナガサキ」
■60年という歳月を越えて資料が語る被爆の実相
■継承部会員と平和案内人の意見交換会を開催
■祈念館だより
■碑巡り・山内繁樹事務局次長が逝去

今年8月、アメリカ・ネバダ州ラスベガス市で原爆被災写真展開催のおり、講話に出向いた市郊外にあるSteve Cozine小学校の児童。継承部会の丸田さんの体験講話に拍手で感謝する子どもたち。
（2006. 8. 7）

国連軍縮週間「市民のつどい」

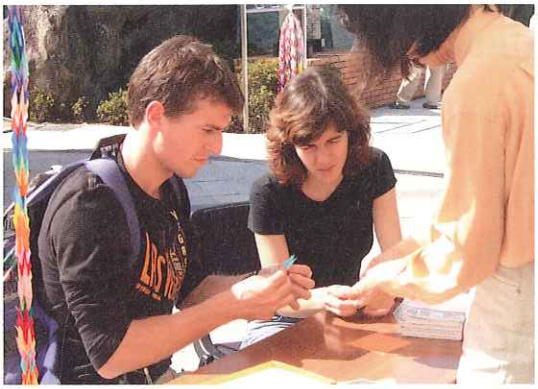


国連憲章が発効された1945年10月24日を記念して国連デーが設けられましたが、それと共に毎年10月24日からの一週間が国連軍縮週間と定められ、平和と友好を願い世界各地で様々な行事が行われています。この期間は地球環境を考える良い機会となっています。

今年も10月28日（土）、いつもなら秋の訪れを感じさせる風を浴びながら、テントや被災パネルの設営を行なうのですが、今年はせみが鳴いてもおかしくないほどの暑さの中、県地婦連のお母さま方とエプロン姿も初々しい活水高校平和学習クラブの皆さんの協力による戦時食の準備やだんご汁の炊き出しで行事が始まりました。

ポップコーンや綿菓子の準備をする私たちの目の前では国際交流部会が主体となって千羽鶴を折り、音楽部会員は会場を盛り上げるかのように、秋空高く平和の歌を合唱してくれました。

また今年も写真資料調査部会の深堀部会長の指示のもと、被災写真パネルの展示コーナーも設営されました。



折り鶴作りに挑む外国人カップル

偶然にもこの日は国際観光船サファイアプリンセス号（アメリカ籍）とコスタ・アレグロ号（イタリア籍）の2隻が寄航。その乗客が原爆資料館見学の途中立ち寄り、また修学旅行の学生も数多く訪れ、平和大行進参加者が来場する11時前から大変な賑わいを見せ始めていました。

ボーイスカウトの子どもたちは綿菓子やポップコーンをもらうと、小さな財布から10円、20円と取り出し、ユニセフへの募金箱に入れてくれました。

12時近くになると日差しが一気に強くなり、だんご汁を食べる人々も噴き出す汗を拭いながら〝戦時食〟に舌鼓を打っていました。

だんご汁作りに汗を流す、県地婦連の皆さんと活水高校平和クラブの皆さん

今回の屋内行事としては、当協会初代理事長である秋月辰一郎先生の生涯を描いたアニメーション映画「アンゼラスの鐘」を原爆資料館ホールにおいて上映しました。

会場には数多くの小学生や一般市民がつめかけ、映写が始まると水を打ったような静けさの中、乏しい医薬品と

医療器具を前に、焼け爛れた被爆者の救護に苦悩する秋月先生の姿を食い入るように見つめていました。

今回もたくさんの方々に被災写真や戦時食を体験し、戦争の悲惨さや平和の尊さに触れていただきました。今後も協会の行事に積極的に参加していただきたいと職員一同願っています。

綿菓子コーナーは子ども達の長蛇の列ができ、係員も汗だく

写真パネルコーナーで外国の人にだんご汁を勧める

この日は、国際観光船の入港もあり、多くの外国人も立寄りました

会場を盛り上げてくれた音楽部会員による歌と演奏

被爆者の思いを未来へ繋ぐために「継承部会員と平和案内人の意見交換会を開催」

被爆体験を語り伝える当協会の継承部会と、原爆資料館や被爆建造物等の案内をしている平和案内人による意見交換会が11月18日（土）、追悼平和祈念館で開催されました。

お互いの気持ちや考え方を知るために、一同に会することを希望する声が、以前より双方から寄せられていました。この度ようやく初顔合わせが実現し、継承部会員17人と平和案内人32人の間で「今、継承を考える」をテーマに活発な意見が交わされました。

最初に、継承部会長の松添博氏が「各自研修を積んで意欲的な取り組みを見せている平和案内人と、仲間として活動していきたい」とあいさつ。お互いの活動内容を、写真を交えて紹介した後、6つの班に分かれて80分間におよぶ話し合いがなされました。

平和案内人からは「実体験のない人が、被爆者のメンタルな部分を伝えていくことの難しさを感じている」「被爆の実相のほか、命の大切さや被爆体験を乗り越えてきた人の生き様を伝える努力をしたい」といった意見が出されました。また継承部会員は「体験はなくても戦争の悲惨さ、命の大切さ、平和の尊さは伝えられる」「何を伝えるかを明らかにしないと、焦点がぼけてしまう。知識を深め、自分の思いとして話ができるようにする努力が必要」「子どもたちに考え方を押しつけるのではなく、考えさせることも大切」とアドバイス。

平和案内人は改めて被爆者の証言を聞くことの大切さを実感していた様子で、お互いに刺激を受けた有意義な時間となったようです。

「今回の意見交換会をきっかけに、今後ますます交流を深めていきたい」と末永副部会長が締めのあいさつ。被爆地の思いを発信し続けるために、継承部会員と平和案内人が協力し合い、これからの継承の在り方を模索する第一歩となりました。

第3回「核兵器廃絶ー地球市民集会ナガサキ」

10月21日（土）～23日（月）

第3回「核兵器廃絶ー地球市民集会ナガサキ」は、核兵器をめぐる国際情勢が厳しさを増すなかで、核兵器廃絶運動の原点である被爆地長崎から、再び核兵器廃絶の声を世界にアピールすることを目的として開催されました。

今回の集会の特徴は、現在の核拡散の動きや日本の核武装論などに対する国内外の市民やNGOの強い危機意識を反映し、「いかなる国も、核兵器によって安全保障を求めるという考えを捨てるべきであること。北朝鮮による核実験の暴挙を強く非難するとともに、これに対するいかなる力の行使にも反対し、平和的かつ外交的解決を求めること。北東アジアの非核兵器地帯の設立を求めること。被爆者と声を合わせ、世界中の市民とともに核兵器廃絶を求めていくこと」などが海外の参加者を含めた共通の意志として確認されたことです。

また、若い世代がこの集会へ自主的参加し、被爆体験の継承や平和問題などに取り組む姿勢が見られたことも大きな成果です。

この集会の集大成である「長崎アピール2006」は、国連をはじめ核保有国を含む在日の各国大使館、国際的な反核NGO、平和市長会議加盟都市などへ送付するとともに、集会のホームページにも掲載されています。

分科会

「青少年フォーラム」

去る10月22日（日）に長崎平和会館で第3回核兵器廃絶ー地球市民集会ナガサキにおける分科会の一つとして「青少年フォーラム」が開催されました。

この青少年フォーラムは、当協会の呼びかけに応じた長崎の大学生、高校生が中心となって準備委員会を立ち上げ、今年の1月から自分たちの手で企画・準備を進めてきたものです。当日は、広島や東京から駆けつけた人達や外国人も含め約70名の若者が、原爆や核兵器についての基礎的知識を学び、被爆者の講話を聞いた後、「被爆体験を継承するために、今、若者として具体的かつ継続的に何をすべきか」についてグループ・ディスカッションを行い、各グループよりその討議結果について発表を行いました。

各グループの発表では、長崎を訪れる修学旅行生のための事前・事後学習用の平和に関するビデオ・DVDを作成し、全国の学校へ配布することなどすぐにでも実現が可能と思われるようなアイディアも披露され、今後の活動に向けて良いきっかけになったのではと思っております。また、参加者同士でメールアドレスを交換するなどこれからも交流を継続していくことを誓い合っていました。

当協会としても、今回の青少年フォーラムが、長崎だけでなく全国的、世界的な広がりを持つ平和に向けた若者によるネットワークに育っていくことを願っています。

平和会館ホールで行われた「青少年フォーラム」

分科会

「被爆者フォーラム」

平和案内人　調　仁美

二日目（10月22日）、祈念館交流ラウンジで行われた「被爆者フォーラム」に参加した私は、平和案内人として『核兵器廃絶へ向けた被爆者運動の今後と被爆体験の継承』のテーマで発言の機会を得ました。

今回平和案内人として参加した反響は大きく、参加者から「フォーラムを身近に感じ、市民レベルでの対話の可能性を見出した。」との嬉しい感想も聞かれました。

私は15分間の発表の中で「被爆のイメージを持てない子どもたちに伝える側として何が必要なのか」との観点から、スライドを使った平和学習や、防空壕を再現しそのスペースを実感して貰うなど、新たな「継承」のスタイルを平和案内人が模索していることを紹介しました。その上で被爆者の「想いと願い」を心に刻み、事実を語り継ぐ事の重要性を発言しました。

他には「〈ヒバクシャ〉と片仮名にすることで人類共通の問題とし、世界規模の連帯が望まれる」「海外でも被爆の実相を伝え共有意識を持つことで非核地帯の拡大を促す」「原爆被害への国家補償や二世、三世への問題が蓄積されている国内の現状」などへの発言が相次ぎました。

私はこのフォーラムを通じ、核問題に対する多角的な視野と幅広い知識の必要性を認識しました。また戦後核兵器の使用を思い止まらせてきた最大の力は被爆者の存在とその運動であり、その双方が危機的状況にある現在、この意志を次世代や世界が継承する為に唯一の被爆国である日本国民の自覚を持った行動が重要と感じています。

「体験のない自分が被爆を語る戸惑いを感じる。」との私の発言を受け被爆者から交流の提案がなされた結果、11月18日に継承部会と平和案内人との意見交換会が実現しました。今後も平和案内人同士が協力し、現実に学びつつ活動していきたいと思います。

原爆被災写真展

NGO長崎大会自主事業

多くの参加者が立ち寄る

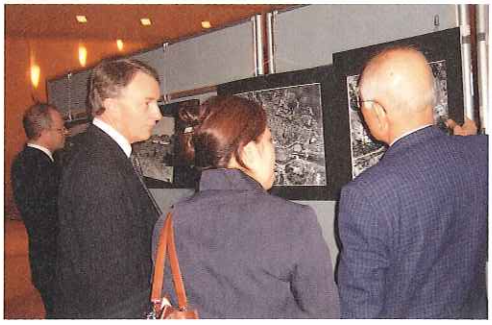
本協会／写真資料調査部会が主催

今回の写真展は、展示場所がNGO長崎集会（地球市民集会ナガサキ）開会式会場である、ブリックホール一階のエントランス広場ということで、大会参加受付の動線にあり、多くの人たちの目を引くこととなりました。

大会参加者の多くは、かなりの関心を持って被災写真に見入り、会場に待機する部会員の説明に熱心に耳を傾けていました。

とりわけ今大会、海外の大臣としてはただ一か国だけの参加となった、ニュージーランドのフィル・ゴフ軍縮大臣とその一行も足を止め、凄まじい爆風と熱線による惨状などを表す写真に驚いた様子で見入り、通訳をとおして深堀部会長に質問を繰り返していました。

このように、今回この写真展を「第3回核兵器廃絶地球市民集会ナガサキ」の開会式に併せて開催したことは、多くの集会参加者に原爆の脅威について考えてもらう絶好の機会になったようです。



被爆写真を熱心に見学するゴフ大臣

祈念館だより

インターネット会議システムによる平和学習

「ピースネット」

（国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館との共同事業）

平成十六年度より、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館のインターネットによるテレビ会議システムを利用し、遠隔地の小中学校を対象に、当協会継承部会交流班による、被爆体験講話を通じた平和学習（通称：ピースネット）を行っています。

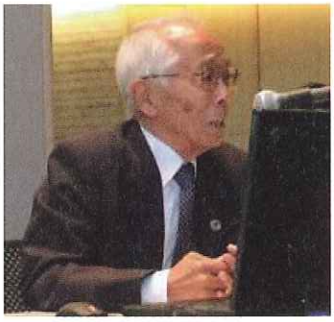
今年度は山形市、つくば市、世田谷区、石垣市、また新たに養護学校を相手にピースネットを行いました。

ピースネットは、インターネットで接続された画面上に、講話者の被爆時の様子等の資料を挿入し、講話者と児童や生徒が、現地にいながらにしてお互いの表情を見ながら被爆体験講話を行うのです。その後、感想発表や、意見交換を行い平和についてともに学び考えることができます。

実施した学校からは、原爆の惨禍や平和の大切さとともに、教科書では学ぶことができない被爆者の想いや、助け合うことの大切さといった心の学習にも繋がると、感動の声をいただいております。

ピースネットは、学校の授業の他にも、教職員研修の一環としてデモンストレーションを行うこともあり、平和学習として取り入れる学校も増え、今後も被爆継承方法の柱のひとつとして、更なる飛躍が期待される事業です。

今年度はICT教育研究大会の公開授業対象としても行われました。



ネットワークを通じて
被爆体験講話を語る和田氏

資料を交えた講話に聴き入るつくば市の生徒達
（モニター画像）

継承部会・ピーストーク研修班による部会員研修を開催

ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会や国立追悼平和祈念館、また団体等の依頼や招きで海外で自らの被爆体験を語った継承部会員に2回にわたって印象を語ってもらいました。

第1回目＝11月10日（金）学習室

〔アメリカ・カリフォルニア州コンプトン市コミュニティーカレッジ〕

「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」

（平成17年3月17日～23日）

室園久信さん

アメリカの一般市民の中には、原爆の脅威と悲惨な実相を知らない人が非常に多いことを感じた。これはアメリカ全般の現状であろうから今後も海外原爆展の必要性が高いと確信した。

主催／ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会

〔アメリカ・ネバダ州ラスベガス市核実験博物館〕

「核実験博物館原爆展」

（平成18年8月3日～12日）

丸田和男さん

ネバタ核実験場のお膝元ということで、企画の段階から内外のマスコミ間で、開催を危惧する記事や賛同のコメントなど大きな反響を呼んだ。私は「長崎原爆の被害者の大半は市民と子どもであり、連合軍の捕虜もいた。投下を巡りどんなに意見が分かれたにしても原爆の非人間性は許されるものではない。」と訴え、戦争や平和を考える契機を与えたと確信をもった。

主催／国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

第2回目＝12月8日（金）学習室

〔マレーシア・マラヤ大学〕

「アジア青年平和交流事業」

（平成18年8月5日～10日）

松添博さん

マレーシアは、一九九五年に国際司法裁判所で核兵器の使用を違法とするよう告訴した「核兵器裁判」の中核を担った国である。多民族国家であるが政治的に非常に安定した国である。政府自ら核兵器廃絶に熱心であり、訪問したマラヤ大学でも学生はまじめで熱心な意見交換がなされ、非常に感銘を受けた。

主催／（財）長崎平和推進協会

〔フランス・パリ大学等〕

「フランスの若者たちに被爆体験を語る」

（平成18年5月9日～16日）

広瀬方人さん

パリの大学、高校、小学校の七か所で延べ700人に被爆体験を話した。講話が終わると各会場とも多数の人から質問の手があがり、参加者の熱意が感じられた。また、残酷な写真は発達段階の児童を考慮するようにとの意見があり、別の写真でも原爆の残酷さは語れると思った。

主催／日仏文化センター

以上のように4人の継承部会員から報告がなされました。この研修会は、平和案内人へも呼びかけを行い数名が参加しました。

次回、第3回目は1月（中旬）に平和学習室で予定されています。

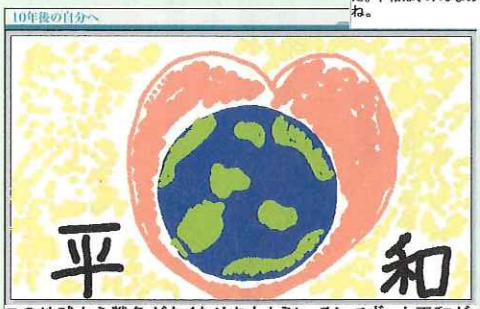
国立追悼平和祈念館

情報コーナー メッセージ紹介

平和の灯を世界中にともしていきましょう

世界は美しい。けれども、戦争は終わらない。だから私達から、平和にする努力をしよう。戦争が終われば、世界はもっと美しくなる。

今日、核実験のニュースをききました。悲しいニュースでした。平和は、みんなの手でまもっていかなければなりませんね。



この地球から戦争がなくなりますように そしてずっと平和が続きますように・・・・・

お知らせ　長崎原爆資料館―特別企画展―

「60年という歳月を越えて資料が語る被爆の実相」

被爆から60年。長崎と広島は、被爆体験の継承という目的を同じくする施設と報道機関が連携して、平成16年度から17年度の2年にかけて、記念事業「被爆資料・遺影・体験記全国募集」を行いました。

この呼びかけに応え、亡くなった肉親が身に着けていた衣服や形見となった学校のノート、被害を記録した写真等々多くの資料が集まりました。

これらの貴重な資料は、半世紀以上の間、寄贈者が大切に保管していたものです。長崎原爆資料館では「60年という歳月を越えて資料が語る被爆の実相」の長崎編第2部として55点の資料を特別展示します。

展示期間：平成18年11月29日（水）～平成19年1月22日（月）
開館時間：午前8時30分～午後5時30分
会　　場：長崎原爆資料館　企画展示室
料　　金：原爆資料館の観覧料が必要です。（大人200円　小・中・高校生100円）
※長崎市民は平成19年9月まで原爆資料館の観覧料は無料となります。
ただし、長崎市民であることを確認できるものが必要です。

主催　長崎原爆資料館　国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　NHK長崎放送局　長崎新聞社
広島平和記念館　国立広島原爆死没者追悼平和祈念館　NHK広島放送局　中国新聞社

溶けたガラス

半分焼けて残った郵便貯金通帳

秋の原爆遺跡・慰霊碑巡りを開催

継承部会碑巡り班による慰霊碑巡りが、11月26日(日)、秋の冷たい雨の中、会員や市民53名が参加して行なわれました。

住吉トンネル工場跡や、奄美大島から徴用された女子挺身隊の寮があった住吉神社周辺、救援列車が停止した辺りにある照圓寺境内まで、約2時間あまりを歩きました。

住吉トンネル工場

今の赤迫電停近くから民家の裏山の崖に6本のトンネルが掘られ、被爆時1号・2号トンネルにはすでに780台あまりの機械が搬入され工場として稼動していました。

被爆直後は、奄美大島から徴用された女子挺身隊員の寮や、大橋兵器工場などで負傷した人たちが押し寄せ、トンネル内は大混乱となりました。

住吉神社

社殿・社務所は倒壊・全焼しましたが、鳥居だけが残りました。

今は商店街となって面影は残っていませんが参道の北側にあった兵器工場の住吉女子寮は倒壊し、夜勤明けで就寝していた多くの女子挺身隊員が死傷しました。

奄美大島から約1,200名が徴用され、原爆により200名あまりが死亡、約600名が負傷しました。

その後400名あまりの人は帰島しましたが、現在も原爆症で多くの人たちが苦しみ続けています。

照圓寺

西町踏み切り付近の丘の上にある照圓寺は、石段を登った所の2本の門柱だけが残り、境内には大橋兵器工場などから多くの負傷者が避難しました。

爆心地を目指した救援列車はこの近くまでしか進めず、お寺の下付近で汽笛を鳴らし続け多くの負傷者を収容しました。この汽笛が被災者をどれほどに力づけたことでしょう。

あいにくの悪天候の中にもかかわらず、ご参加いただいた皆様たいへんご苦労さまでした。

今後も、碑巡り班の活動の中で新しい企画がなされ次第お知らせいたします。

平和推進協会会員数

維持会員	1、317名
賛助会員	160名
臨時会員	8名
学生会員	7名
合　計	1、492名

平成18年11月30日現在

ご寄附ありがとうございます

10月から11月末現在までの寄附者です

・匿名　（一万八千円）

・普恩寺　仏教婦人会　（一万九千八百六十円）

・本田　貞勝　（二千七百円）

（敬称略）

山内繁樹事務局次長が逝去

去る11月11日(土)午前1時25分、本協会事務局の山内繁樹次長が、心室細動により急逝いたしました。56才でした。本年4月に市民病院の事務長職から、本協会に異動となり、8か月あまりの短い期間ではありましたが、本協会が抱える課題の解決に向け、また事業等の展開に意欲的に取り組み、事務局の先頭に立って歩み始めたばかりの時の訃報でありました。

皆様方には、たいへんご心痛をおかけいたしました。この場を借りて皆様方のご厚志に心からの御礼を申し上げます。

今後は、事務局員一同、一丸となってこの悲しみを乗り越え業務に励んでまいります。

今後とも変らぬご協力を賜りますようお願いいたします。

(財)長崎平和推進協会　理事長　横瀬　昭幸
事務局長　多以良光善
ほか事務局員一同

被爆61周年・協会設立23周年記念 島田洋七 講演会 『元気・勇気・やる気』

島田洋七さんの人気と、日中の好天も手伝って、会場となった平和会館には開場の1時間も前から200名以上の行列ができ、開演前には716席すべて予定どおりうまってしまいました。

島田さんは、第1次お笑いブームの立役者であり、B&Bのコンビで一世を風靡した人物であるにもかかわらず、会場の皆さんへの気さくな語りかけで講演会が始まりました。

現在ベストセラーとなっている「佐賀のがばいばあちゃん」で登場する、決して恵まれているとは言えないが、心豊かな子どもの頃のおばあさんとの泣き笑いの生活。そして、離れて暮らすお母さんへの思いなど、本来なら涙ながらに語られるような話を、なんとも面白おかしく巧みな話術で話してもらい、会場は講演終了まで爆笑と、ちょっぴりの涙に包まれていました。

また、島田さんの話は子どもを取り巻く現状や平和にまでおよび、皆さんからは、思った以上の感動を貰ったと、絶賛の声が聞かれました。

今後とも、ますます多くの会員の方に喜んで参加してもらえるような企画を考えていきたいと思います。

本紙は再生紙を使用しています。
平成十八年十二月二十五日発行
印刷　株式会社　インテックス